

1960年代のファッションについて

小 倉 春

はじめに

1960年代はファッションが多様化し、激しく移動した時代である。60年代をふりかえってみると、20年代から50年代のリバイバルがその主流になっているように思われる。

クラシック・ナチュラルの懐古調は、単なるデザインの繰返しということではなく、社会情勢とか時代思想などによって裏付けされ、新しい異質のものとして表現されてきた。60年頃までは、かぎられた上流階級や中年層を対照にして発表されてきた、パリ・モードが、年令層の低い人達や、一般大衆を意識しはじめ、ついに大衆の創り出すファッションと、ともにあゆみはじめた。そして既成服のファッションが、オートクチュールと同じ速さで流行の波に乗ってゆく時代になった。特別の存在だった、パリ・コレクションは、日を待たず、われわれにも報道され、また既成服として登場しモードを身近に感じることができるようになった。また経済的にも、オートクチュールは、大きな曲り角にさしかかった鯛がある。このようにクラシックな、ナチュラル・ルックを背景にしながら、激しくゆれ動いた1960年代のモードには、ヨーロッパ的機能的なものが土台になっていることも理解しなければならない。この時代の服装の動きをシルエットやその構成などの面から考察しようと思う。

(1) 1920年代から1950年代のファッション

60年代のモードを考えると、その原流とも思われる20年代から50年代にかけての流行を振りかえってみなければならない。第一次世界大戦は服飾界に大きな革命とも思われる影響をあたえた。それまでのヨーロッパの社会制度、生活状態、人々の思想は封建的、貴族趣味的であって、流行もごくせまい閉鎖的社会のみおこなわれていたが、戦後そういった伝統や階級の壁は打破られ、技術の開発は進み、婦人も男性とともに働く機会が与えられた。女性は今までの長いスカートやレースのある衣服や飾りのあるボンネット等を捨

て、服装を、単純で機能的方面に、むけていった。そしてフラッパーと呼ばれる行動的女性がこの時代のモードをリードするようになった。一方美術界に於ても第一次世界大戦から戦後にかけてキュビズムとかダダイズムの運動がおこり、ここにも19世紀文明との断絶がみられた。モンドリアンの、黒の直線によって分割された画面を、赤、白、青、黄、などの原色で彩った幾何学的抽象画が、発表されたのもこの当時であった。一方ではハーワード・カーター、の手によって、ツタンカーメンが原型を崩さずに発掘された。これ等のことが刺激となって服飾界にも単純化された造形や、エジプト調のシルエットやアクセサリが現われた。エジプト風のチューブラインは、ウエストを印象づける一切のものを取り去り、ウエストラインはかつてみられなかった程ひくくなりヒップの位置までさがった。髪は短かくカットされ、帽子もクラウンだけのものに、今までの編みあげ風の靴は短靴にかわった。こういったエジプト調はその後約10年間続いている。スカートは次第に短くなり膝が完全に出るまでになった。黒い靴下が鮮明なベージュになったのもこの頃である。胸部を目立たないようにし、ウエストをゆるく、スカートを短かくしたボーイッシュなスタイルが流行した。生活は種々な方面に加速度的になり、チャールストンやフォックストロットなどのテンポの速いダンスが流行し、刺繍やフリンジに飾られた衣装の中に美しく体の動きを描きだした。またローウエストの服を着た婦人は腰をつき出して立たなければ、バランスがとれなかった。これまでハイウエストにマフなどを持って腰を感じさせないようにしていた社交会の婦人達にとって、こうしたスタイルは、かなりショッキングなものであったらしい。28年頃になるといわゆるギャルソンヌ・スタイルは飽きられ、ヴィオネが発表したバイヤス裁ちのドレスが女性のやわらかい、美しさを再現した。

そしてスカート丈はやや長いめに、ウエストラインは自然の位置に帰った。服装ではロマンティックなものや、ペザント風のものなどが好まれ、ワルツの曲とともに、やわらかい、美しさが主流となっていたが、

世界各国は第二次世界大戦にと重々しいあゆみを進めていた。33年、スキヤパレリは、肩巾をパットで強調したミリタリーモードを発表した。彼女は当時、すでに高級既服の考えを進めていた。シャツ・スタイルは、30年代に完全に女性のものとして完成をみたがその時すなわち39年第二次世界戦争がはじまった。戦後はロング・スカートのエレガントさに続いて、クリスティアン・ディオールの、アルファベットライン、チューリップライン、ヴァレンシヤガのサックドレスなど発表され、服装のアバンギャルドといわれる時代を迎えた。これは当時のデザイナーが、ヨーロッパ的のものに行詰り、性を超越して、単純化された平面と衣服の造形美を主にした前衛的スタイルである。そしてそのシルエットのそこ、ここに東洋趣味が強く出ている。この傾向は戦後、4、5年に始まり約10年の間、全盛をきわめた。しかしこういった誇調の高いシルエットも、58年頃から転換期をむかえ、25年頃のナチュラル・ルックに帰ろうとしはじめている。20年代から30年代にかけて当時活躍したデザイナーのなかで、ガブリエル・シャネル、は特に60年代のモードには関係が深く、60年代はシャネルの勝利の時などとも謳われた。

(2) ナチュラル・ルックのリバイバル (60年代)

60年代のファッションは、20年代から30年代及び50年代の繰返しといわれるが、社会情勢からみても類似した点がみとめられる。

服飾についてみると、50年代に、極端にまで変形され、造形された、前衛的モードが、ナチュラル・ルックに帰ってきた。

変形的なものは控え目になり、洗練されて、その表現はきわめて自然なものになった。これは、25年代のフラッパー・スタイルの復活であり、20年代の花形デザイナー・シャネルの自然主義の勝利といわれた。しかしモードの主流になったナチュラル・ルックは、シャネルの得意とするカーディガンルックのことではなく、そのシルエットのような自然な線で女性の体を包むことであった。その当時のナチュラル・ルックは、ヨーロッパ的のものが土台になり、それに、アバンギャルド的なものが加味された造形的なものであった。そしてクラシックのリバイバルはあるものは切替えのなかにまたあるものはシルエットに、新しい感覚をともなって個性的に美しく表現されている。

60年のテクニックには、ふとい目のブレイディングやボウ・ブルゾンの形式、ソフトショルダーで裾が軽

く細められたコート、ルーズフィットのルダンゴード、ロードサックなどがみられるが、いづれも25年当時の薫の強いものである。このようなシルエットを構成の面からみると脇下に皺を出さないように工夫され、極端なまで、テーラードされたキモノ袖 (図ⅠC, D) 女性的なセットインスリーブ (図ⅡC, D) 男子服に使われた二枚袖の女性化 (図ⅢC, D) ドレッシイなラグランスリーブ (図ⅢA, B) など研究されている。ここに、テーラードなものと同様にドレッシイなものあゆみよりが構成の上で感じられる。その他滑らかな肩線をもった、ソフトショルダーや袖付などが工夫された (図ⅡA, B)。

60年代の初期には鶴の足のように細いパンタロンが、(図ⅣA) 女性の間に流行した。この細いパンタロンは細いゆえに女性の自然な美を意識したナチュラル・ルックの現われではないだろうか。「女性が、パンタロンを穿くことは、男女の権利が、平等になったことを示すものだから、これからの女性は、スカートを放棄するのではないか」等と推測する人もあった。

布地の流行をみると、ジャージイ、ニットクロス、革など、そしてコートにはシャギウールなど毛足のあ

るものがみられる。
61年の春以来、モードのリバイバルということばが盛に使われ出した。62年から63年へ、バストが意識されはじめた。ふっくらした胸、自然な丸みをみせるヒップ、ウエストは、やや細めの蜂腰といわれるスタイルである。スカートは軽やかに膝をかくし、あるくたびに膝の出る位のもので、チャールストン時代を思わせる。ディオール (マルク・ボアン) はこの時アローラインを発表した。62年のパリ・コレクション通信には「特徴は柔く流動するシルエットに、四角い肩、締めつけないウエスト、スカートは短かく、中でも膝の上15cmのショートスカートは人々に驚異の眼を瞪らさせました。」「デコルテは深く午前のスーツにさえその傾向がみられた。衿明きはV型が多く、その先に、ラバリエール型の蝶結びが軽やかに結ばれた。アクセサリは幾重にも首の廻りをカラーのように巻いたエジプト式のもの流行している。」等の記事があった。大きな三角形のショールやスーツの衿に毛皮を使ったものが発表された。その他、太い毛糸でタートルネックのような衿をつけたり、新しい素材をつかって毛皮のもつボリュームを感じさせるテクニックなども流行した。62年カルダンやニナリッチは、誇張された深い大きな衿のコートを発表しているが、これは30年の頃「無帽の女」といわれたスタイルの繰返しのよう

思われる。

着装上の配色では、今までみられなかった傾向が考えられている。例えば、グレイのドレスに白の帽子、黒の手袋、コートは白、黒の靴、あるいは帽子だけ茶にするとかいったとりあわせや、ピンクのコートに黄色の靴、白い帽子というような、複雑な統一のなかにリズム感を漂わせている。こういった配色の考え方は、和服の色彩構成にみられるような複雑性を、ヨーロッパ的に解釈しようとする一種の東洋趣味の現われと思われる。

単純な衣服のなかにできるだけ材料美を生かして組立て、縫目はつぶさないでふっくらさせておくといったような、今までのヨーロッパの裁縫史にはみられなかった技巧がこのころディオール等の作品に工夫されているがこれも東洋趣味に端を発しているのではないだろうか。

第一次大戦後、タウンウエアスーツにまで発展したが、その後姿をみせなかったジュップキュロットが再び流行してきた。またシャツルックは常にデザインの骨組みにはなっていたが50年代のアバンギャルド的感覚では表面に出ることができなかつたけれど、63年頃から再びシャツウエスト・ドレスが見直されてきた。

(3) 若返ってゆくファッション

64年後は前衛的な、シルエットも一応、落ち着き、デザインは芸術美を失なって平凡になってきたといわれるが、30年代のリバイバル調は強くなってきている。宇宙への関心に平行して、スポーティな感覚は、ますます都会化され、同時に素材もその中に消化されていた。すなわちスポーティな素材のレザーとかジャージが、スポーツウエアからカクテルドレスまで進出している。帽子も、カスケットとかベレ帽風のものが流行した。そしてオートクチュールも若々しく、着やすいシルエットを発表するようになった。デザイナーとしてはバランシヤガ、マルク・ポアン、カルダン・ニナリッチ、ジバンシイ・シャネル、サン・ローラン達を中心となって活躍している。

またイタリーデザイナーによるフランス風のなかに、南欧風の味のあるデザインやアメリカ的味のあるデザインが、モード界を刺激しはじめている。

ディオール(マルク・ポアン)の作品については、彼は女の体をイギリス的感覚と知性によって計算して造形に打出していると評されている。彼の作品にはスポーティな歯切れの好きを感じさせるものがある。カルダンは簡単服化されたもののなかに、自分の持つて

いるドレッシイな個性というものを非常にうまく使っている。ステッチを例にとると、ステッチというスポーティな感覚のものを巾広くかけたり太い糸を使ったりして、ドレッシイさを表現している。ボタンにしても、数をたくさんつけるとか、必要以上の大きな穴にするとかして、機能的なボタンを、逆にドレッシイなものにしている。こういったデザイナー達によって、モードは次第に若々しいものにされていった。シルエットの特徴は、スカートがやや開きぎみで、フレヤーとか美しいプリーツが使われ出した、そして腰に対する印象が弱まりデザインの中心が胸の方に移行した。バストダーツは胸のふくらみを暗示し、ウエストは比較的太く、丁度、ギリシャの彫刻を思わせるような、シルエットである。自然ハイウエストとかプリンセスラインのような形をとり、彫刻のように美しい作品がニナリッチや、パツウによって発表された。この中にあって、ジバンシイとかワレシヤガの作品の中には、やはり造形的な芸術美が濃く感じられるものが多い。65年後若い人達の間では直接法の造形や変形は全く姿を消し、スカートの丈は一層短くなり、ウエストラインはルーズに、そしてなんとなく胸を意識させるといったチャールストン時代のリバイバル調である。構成の面では柔かな感じのフラットルックの胴体に、肩巾を強調したセットインスリーブをつけようという試みがされいている。60年代以前のセットインスリーブ、特にテラードな二枚袖はキモノ袖とは全然別の構造であったが、この頃になって、女性的な袖の特徴を加えた細みのものが考えられてきた(図Ⅲ.C, D)。ナチュラルルックの演出のために、バイヤス裁ちのスカートや袖、またジャージやニットクロスが素材として使われた。またナチュラルルックの流行は新しい形態の、厚地のウールドレスの上にもみられる。このドレスはダンディなスポーティさもあれば、エレガントな女らしさも含まれ、またコートの要素もあって、従来の薄地のドレスとは、はっきり区別される新しい存在で、これはコート・ドレスとして発展して行っている。そしてここにはスーツには求められない女性の楽しさがあつた。

(4) ミニスカート時代

65年秋サンローランは、モンドリアンの幾何学的画面を連想させるようなデザインを発表し、続いてクレージュは、宇宙服のように極端に丈のみじかいドレスを発表して人々を驚かした。これ等の傾向は若向きをねらっているデザイナー達に、新しい示唆を与える

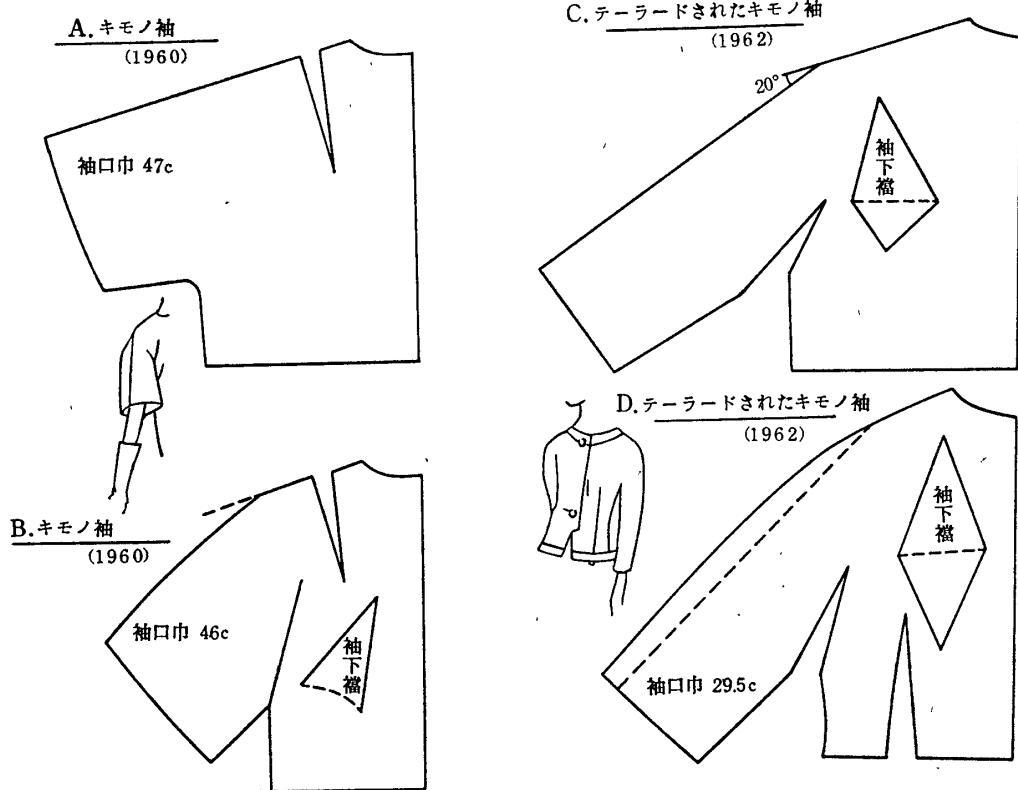


図 I

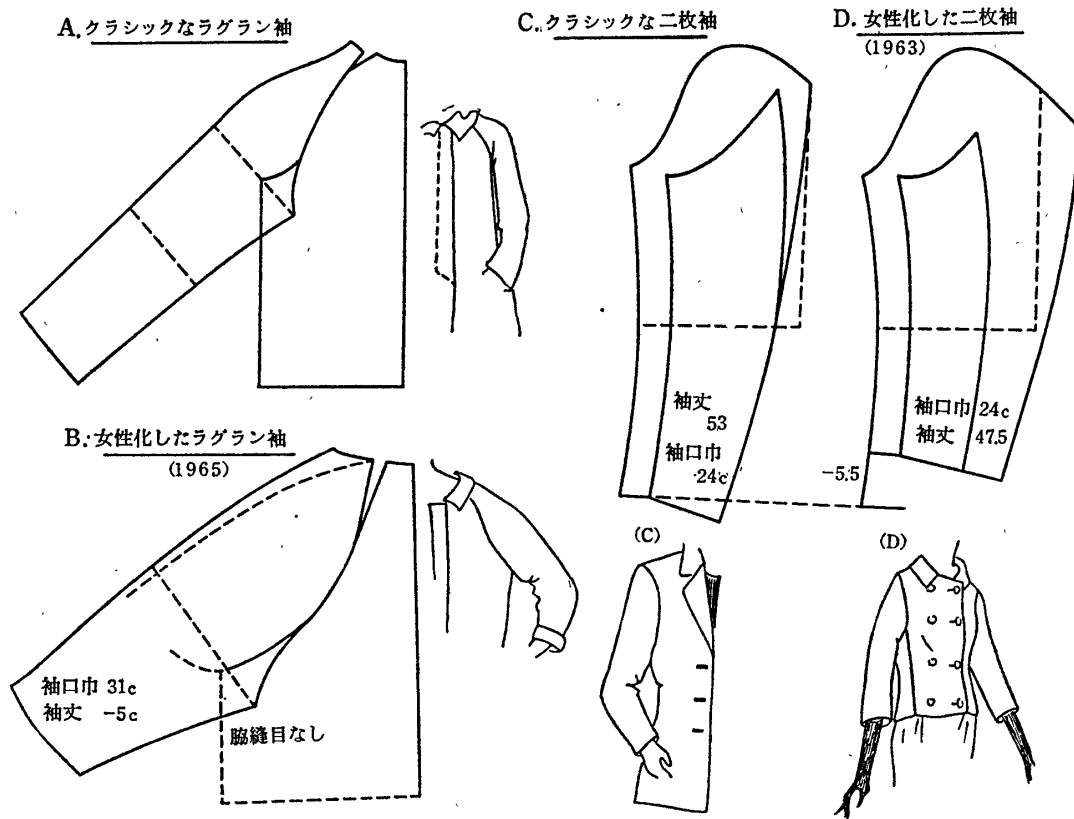
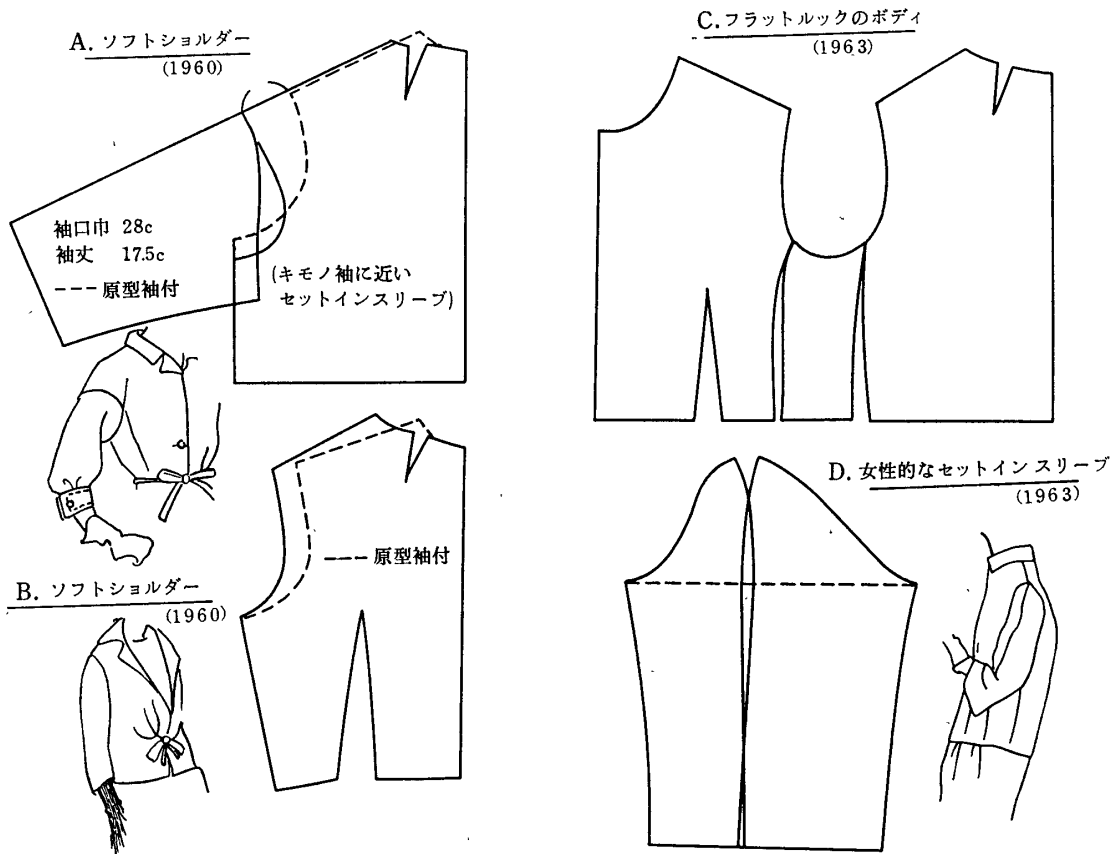


図 II



図Ⅲ

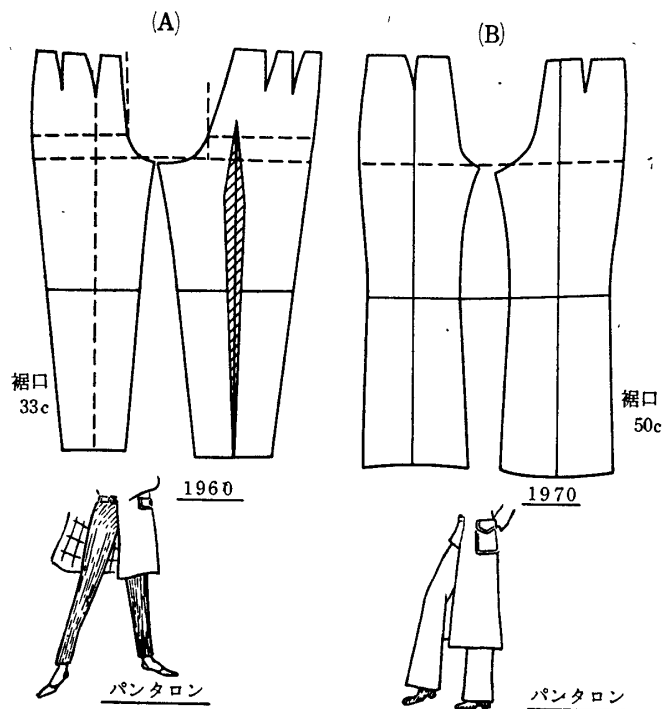
大きな動機になった。この新しいシルエットには東洋的なものがきわめて内面的に隠され、幾何学的直線が重要視されている。クレージュは保守の時代に完成されていた服飾の約束事を全てかなぐり捨て、若々しいデザインを開拓していった。そして大衆の間に芽ばえた短いドレスを、すばらしい創造力によって見事な芸術品にかえて、一般女性に返している。短いスカートは爆発的な勢いで拡がり、極端で強い色同志の組合せや、面の分割によるデザインやアップリケが変形したような大きな穴あけのテクニックなども盛に使われた。このような流行は丁度第二次世界大戦後にアバンギャルド的なものが成功したのにも匹敵し60年代におけるモードの革命とも考えられる。

若い人達のミニスカート流行の背景になっているものを考えると、反対制的若い世代の登場、性への解放、若者の体格の変化、スポーティな社会環境、冷暖房の普及、テクノロジーの発達、モードの大衆化などが挙げられている。この他パンタロン・スーツも若い人達の間で歓迎され、ファッションは若い人達とその主導権を握ったような形になった。この傾向はオートクチュールの互解までを懸合させた。けれども、バランシ

ャガとかジバンシイの作品にはやはりオーソドックスな気品が残されており、シャネルはこの激しい若者達の間にあっても、独特な素材やへりとりを使って、本当にナチュラルなシャネル精神を、静に続けている。

短いスカートは靴や靴下にまで影響し、こまかい模様入りの靴下や洋服と同色のそれ等は衣服の一部として考えられ、ハイヒールは姿を消した。テクニックとしてはチューブドレスや、シャツドレスなどがみられ、コートはルダンゴード形式のものが多く、袖はひきつづき細く、肩巾は狭く、ウエストは細まって裾が朝顔型に開いている。またやわらかい感覚を求めため、総バイヤスに裁断したコートも多い。こういったコートのアクセントには大胆な切替が装飾的にいれられて構成された。また丈が短い関係からドレスはシフトドレスとかプリンセスドレスが目立ちベルトは、ほとんど使われていないがベルトをつけるときは、腰骨のあたりに巾広いものを用いた。

素材も宇宙時代にふさわしく、サテン仕上げの化繊とかエナメル仕上げのビニールクロスなど、メカニクな冷いものが使われはじめた。ニットやジャージなども多く、夏物としてはスパンレーヨン、冬のコート



図Ⅳ

にはダブルフェースのもの（リバーシブル）が全盛をみせた。そしてネックレスなどのアクセサリはほとんどみられない。

66年から67年にかけてモードは激しく動き、多様化し、捉えどころがないときえ考えられた。常識的なもの、オーソドックスなもの、大胆で奇抜なものなどが乱立し、デザイナー達は、自由に個々の考えで表現していった。

68年パリに起った五月革命は経済面とかその他いろいろな影響を、パリ・コレクションに及ぼした。例えばアクセサリや手間のかかる仕事をひかえるとか、明かるい赤はくすんだ赤に、その他の色彩も押えられた静なもの選ばれた。

またサンローランのシティパンツは、パンツロンを本格的な都会着とした。これは裾が腰から床までほとんど真直でゆったりした感じがする（図4-B）。これは今までのミニスカートの転換を解決する方法として打出されたのではないかと想像されている。しかしその後もミニスカートは定着した形をとり、全体のシルエットは細まり、一時見られなかったベルトが再び姿をみせはじめる。長い上衣とか短かめのコート、黒っぽい靴下、長いブーツ、房のある長いストールなどミニスカートに組み合わせられ、若者を中心にして装われた。こうして若い人達のファッションに対する関心は強まりスポーティな活気のあるモードを創り出す源

動力ともなり、ついに大衆がファッションを創り出す時代がきた。パリ・コレクションはこうした理由や経済的な理由もあって芸術的なひとりよがりの存在が許されなくなった。昔のモードは社交会にはじまり、それが末端に伝わっていったが、60年代中頃からは、大衆のなかから生まれてくるものによって形づくられ、オートクチュールは底辺層のヒッピー調とかジブシールックまで意識してゆかなければならない時代になった。そしてオートクチュールのモードが既成服のなかから盛りあがってくるような感じさえた。

70年のコレクションではついに全盛をきわめたミニスカートも終りを上げる気配をみせた。ミニ、マキシに類するもの、ミニとマキシの組合せ、パンツロン、プルタイトとスーパーミニの組合せ、など、スカートは多様化され、65年にはじまった、ミニスカートの流行も、ようやく曲り角にさしかかり、ゆるいテンポで70年代へと動きはじめた。

こうした60年代の多様化し変化していったシルエットを振り返ってみるとき、その基礎にはいつもヨーロッパ的スポーティさとほのかな東洋美へのあこがれ、が土台になったナチュラルルックがあり、そういったものの上に新らしい表現が激しく動いていたように感じられる。そしてこの時代のファッションにはクラシックナチュラルの思想がいつも、どこかにひそんでいたように思われる。

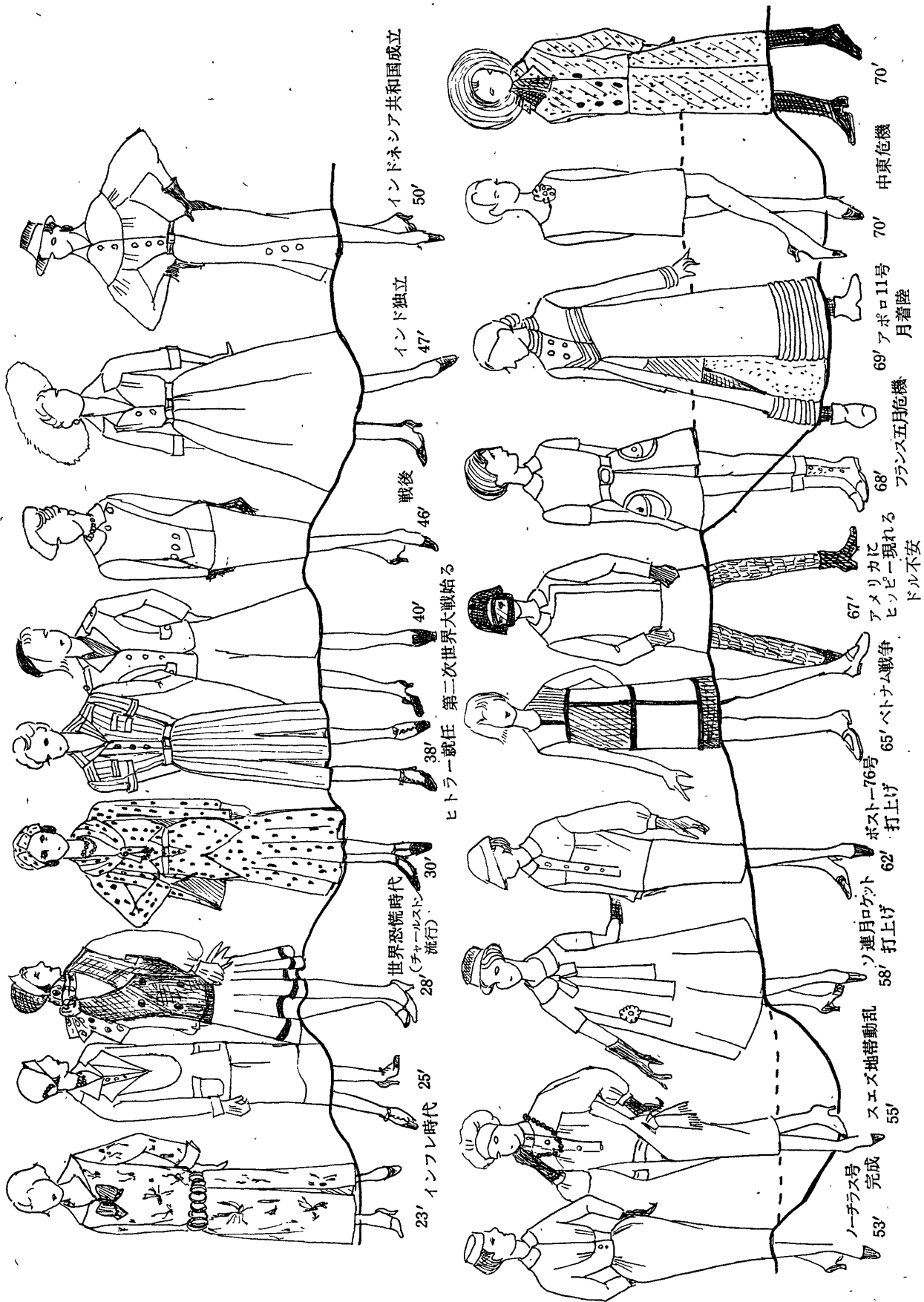


図 V 1920—1970のシルエットの変遷

(5) ガブリエル・シャネルについて

終りにシャネルと彼女の自然主義についてふれたい。シャネルは20年代のオートクチュールの花形であり、かつ60年代に至るまで、デザイナーとしての活躍を続けていた彼女は、モード史上希有の存在である。20年代のデザイナーのポールポアレとは年令的の差もあったが、時代の変遷に対応する能力にかけては格段の差があった。20年頃の彼女の作品には、単純なジャケットに、アコーディオンプリーツのスカート、ボタンも本当に機能をはたすだけのものがつけられ、プルオーバーを組合せたものが発表されている、単純で簡明なのが彼女の作品の特徴であった。彼女はそのラインを数10年に渡って続けている。この単純さはたやすく真似しがたいものであり、この初期にみられた、一つのものを固執し続け模倣を恐れぬ態度は、最後まで、一貫して変らなかった。第二次世界大戦後、クリスチャンディオール等による前衛的造形主義の華やかなる突然、個性的なナチュラル・ルックの作品を発表し、世界のファッション界に問題を、なげかけた。シャネルといえれば誰でもが、カーディガンを連想するほど、彼女のカーディガンは有名であるが、これを組立てている線の中にこそ、シャネルの自然主義を感じる。60年代はシャネルの勝利ともいわれたが、シャネルの作品そのものが最高という意味ではなく、シャネルの自然主義が勝利をしたということである。65年オートクチュールの作品全体が、シャネルのような、ナチュラルルックに帰ってきたことを思えば、シャネルがモード界の予言者といわれたのうなづける。

シャネルの作品に使われている独特のツキードにしても一貫して、ヨーロッパ風のオーソドックスなもの、スポーティなものが土台になっていることがわかる。着やすいことを目的にした、何の変化もない、カーディガンや細身のドレスは、フランス特有のテクニックや手芸でブレディングされ、また美しいネックレスなどで、まるで油絵のように飾られた。シャネルは20年代に、シャネル・ルックを発表して以来、衣服の本来の軌道を落着いた歩調であゆみ続けている。

1967年のシャネルの作品についてつぎのようなこと

が報告されている「意固地なココは頑として膝を隠しています。短いローブに慣れた私たちの目には、それはとても長いものに思われました。

いつものツキードのスーツは2分の1丈の上衣とラッピングスカートとブラウスの組合せ、そしてもちろん永遠のシャネルのシルエットです」モードエモード No. 103 より。

おわりに

1960年代の一部にふれたにすぎない記録であるけれど、あらためて、パリ・コレクションの芸術性の高さを再認識させられた。その背景には重々しいヨーロッパの文化がひそみ、新しいシルエットは如何に単純化されたといっても、その裏に面ひそむヨーロッパ服飾の歴史をみのがすことはできない。東洋調のファッションのなかにもヨーロッパ的なものが土台になっている、そういった複雑さを知らなければ、これからのファッションを理解することは難しいと感じさせられた。60年代の動きのはげしいモードを通して貫いているナチュラルルックにしても、そういったものを背景にして展開されている。

ヨーロッパの婦人の服装には常に機能的（スポーティ）なもの、室内的（ドレッシイ）なものとの二つの流れがあるが、60年代においてはこれ等が、デザイン、構成、素材のあつかい方等の上で互に交流し混合しあって表現されていっていることを知った。

参 考 資 料

- | | |
|--|--------|
| 日本女子洋装の源流と現代への展開 | 石川綾子著 |
| 西洋服装史 | 村上憲司著 |
| ファッションの歴史 | 千村典生著 |
| 目でみる女性ファッション史 | 青木英雄著 |
| 私のきもの (No. 47, 56, 60) | 伊東 茂平 |
| モードエモード (No. 63~No. 102) | 伊東 茂平 |
| モードエモード (No. 103~No. 127) | |
| 伊東会 夏期講習会テキスト ('60, '61, '62, '63, '64, '65, '66, '67, '68, '70) | |
| ファブリ世界名画集52 | モンドリアン |
| (日本風俗史学会50年度研究発表会10. 26に報告) | |